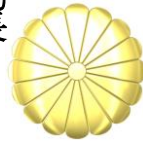


大久保利通公

生誕百九十年記念祭感慨

天台宗大雄山南泉院住職

西南之役恩讐を超えての会事務局長



宮下 亮善

鹿児島神道青年会より寄稿文の依頼をいただきました。奇しくも三島由紀夫義士50年忌当日のことでした。

福岡在住のインド人留学生いわく「現代においてもサムライの子孫は生きていると思うが、現代におけるサムライの意義とは何か。なぜなら江戸時代にはサムライにとって富みや金はあまり重要ではなく、名誉や忠誠心を重んじていた。現代ではお金が個人が生きていくのに最も重要だと信じられているから」。

この、若きインド人留学生にどのように答えられますか。『現代における武士道精神はいかに』と。

スーダンの33歳の青年が日本人青年3人と拙寺を訪問しました。彼のスーダンの青年いわく「日本人がうらやましい、神話に繋がる天皇をいただく永き伝統が。自分の国にはこのような素晴らしい文化がない。日本人はもつと誇りをもつべきだ」と。よく日本の歴史や文化にたいする理解が深く、武士道に興味を示す青年であったので、彼に問うてみた。

「君に尋ねるが、武士道とはと問われたら何とこたえるか」と質問したら、即座に『義』だと。3人の日本人青年たちは啞然としていた。『義を見てせざるは勇なきなり』義を守るために腹を切る。それが武士道だと。3人の日本人青年たちに言いました。「君たちは日本精神を彼から学んだらどうか」と。

イギリス人27歳の自然農法を学ぶ青年の訪問を受けた。日本の印象を問うてみた。彼いわく「鎮守の森」と、神と自然が一体している。伊勢の『式年遷宮』の事をも理解し、日本文化は素晴らしいと。

ミャンマー人留学生だったか、韓国人だったか、中国人だったか、はつきり記憶がないのですが、留学生に聞いたことがあります。「いま、寺まで来る間の道端に『100円』売りの無人販売所があったでしょう。どう思ったか」と尋ねたら、「僕らの国ではとても信じられない、考えられない、泥棒をしないのか」と。驚いていました。

韓国の大学生と2週間ホストファミリーとして生活しました。彼いわく、「和尚さん、日本に来るについて西郷隆盛と吉田松陰を勉強して来ました」と。それは素晴らしいことだ、まさしく鹿児島は西郷隆盛の在所。縁の

場所を案内しました。南洲墓地、城山洞窟など、最後に西郷銅像前に案内し記念写真をと思い西郷銅像をバックに写真を撮ろうとしたら、もじもじして写真を撮らせようとしなない。

「君は西郷隆盛を勉強して来たと言っただろう。遠慮はいらんからそこに立ちなさいと催促しても立とうとはしない。「ああ、そうか、『征韓論』のことか」と。「そうなんです。韓国では西郷隆盛のことを良く言わない。西郷隆盛と一緒に記念写真を撮ったら大変なことになる」と。「ああ、そうか、それなら君に問うけれども、あなた方韓国人を見て、伊藤博文を暗殺した安重根の悪口を言う日本人がいるか。西郷隆盛も安重根も私情をもって事bec成そうとしたわけではないと理解しているから批判することはしない。そこまで君が言うのであれば言わせてもらおうけれども、あの当時、日本が君の国を併合しなくてもロシアの

植民地として併呑されていたと思う。日本が日清、日露戦争に負けていたら侵略され当然のごとく植民地化されていた。それが、当時の国際情勢の大きな潮流であったし国際常識

だった。それを西郷隆盛や大久保利通など維新の志士たちがそれぞれ命懸けでこの日本という国を守り、列強の侵略を防ぎアジア、アフリカで唯一独立を毅然として守りとおした。

だからこそ西郷隆盛や大久保利通など維新の志士たちを日本人は誇りに思っている。今に至って、君たち韓国人や中国人が過去の歴史に触れて、ことあるごとに日本を非難するけれども、非難するべきは当時のあなたがたの指導者の不甲斐なさを非難すべきである」と。

彼の韓国の大学生が帰国し手紙が届いた。

「和尚さん、僕は和尚さんを尊敬する。外国人の僕にたいして、はっきり自国の主張を述べる姿勢に感動した」と。日本人は元来自己

主張が上手ではない。できるだけ相手を傷つけず穏便にすまそうとする。ある意味美德ではあるが外国人には通用しない。

以上、紹介した外国人青年たちの日本人観、日本文化への憧憬、現代の日本人が戦後忘却したことを問い詰めている。まさに、三島由紀夫の「われわれは戦後の日本が、経済的繁栄にうつつを抜かし、国の大本を忘れ、国民精神を失い、本を正さずして末に走り、その場ののぎと偽善に陥り、自ら魂の空白状態に落ち込んでゆくのを見た。政治は矛盾の糊塗自己の保身権力欲偽善のみが捧げられ国家百年の大計は外国に委ね敗戦の汚辱は払拭されず、日本人自ら日本の歴史と伝統を潰してゆくのを、歯噛みをしながら見ていなければならなかった。われわれは戦後のあまりに永い日本の眠りに憤った」。

『私の中の二十五年』に、「このまま行っ

たら『日本』はなくなってしまうのではないかという感を日ましに深くする。日本はなくなつて、その代わりに、無機質な、からつぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な抜け目のない、或る経済的大国が極東の一角に残るであろう」。

敗戦後、GHQの占領政策のもと『菊と刀』すなわち、天皇と武士道の連環を永遠に断ち切るこそが重要な政策課題として進められて今日にいたっている。

あらためて、明治維新百五十年をふりかえる時、その維新の志士たちは何のために戦い命をかけてきたのか、その意志をどのように次の世に語り継ぐのか、後事を託された者が考えなければならぬ事だと思ふ。平成から令和へ時代は大きく変わり、二千六百有余年万世一系の皇室の存在をどのように受け止めたらいのか、欧米列強の押し寄せる植民地

支配に対して国を挙げての抵抗運動であつたわけで、公武合体か尊皇攘夷か国内は対峙し多くの尊い命が失われた。すなわち、維新の最大の意義は皇室を護ることと欧米列強の植民地支配を排除することであつたといえる。

何故なら、欧米列強の国々は一神教的価値観を有するものであれば、1つの国に2人の国王の存在を認めず、1つの国に2つの宗教は認めない。当然彼らが信奉する価値観を強いることはあきらかである。百五十年前に列強の支配を許す事になつておれば、皇室は廃絶され元号も無きものになつていたであろうと思われる。

藤田東湖先生の『正気の歌』に「死して忠義の鬼となり極天皇基を護らん」まさに、天地の有らん限り皇室を護る気概を吐露している。西郷隆盛公もその『獄中感有り』に「朝に恩遇を蒙り夕に焚阨せらる。人生浮沈は晦

明に似たり、縦い光りを回らさずとも葬は日向かう。若し運を開く無くとも意は誠を推さむ。洛陽の知己皆鬼となり。南嶼の俘囚独生を竊む。生死何ぞ疑わん天の附与なるを。願わくば魂魄を留めて皇城を護らん」。たとえ、命は亡くなつても、魂だけはこの世に残し皇室をいつまでも護りゆかんと。捕らわれの身でありながらも、その気概を吐露している。大楠公「七たび生まれて賊を滅ぼす」。その尊皇の思いに通徹するものがある。大楠公を祭る湊川の墓前に西郷隆盛、大久保利通、坂本龍馬、木戸孝充、吉田松陰、高杉晋作、伊藤博文、など、京都、江戸往来のたびに墓前に大楠公の尊皇の忠義を我がこととして、国事に奔走したといわれている。まさに、『正氣時に光りを放す』有史以来の国家的危機を救つた志士たちであった。

城山下の西郷隆盛公、高見橋の大久保利通

公、今に居ませば、この現今の日本国の有り態を、どのように眺めておられるのか聞いてみたいと思うのは小生一人であろうか。

チベットやウイグルに対する中国共産党のジェノサイド（民族大虐殺）に対し、人権非難決議もできない国会議員が、世界の平和と国家の安全保障を語る資格があるのか、その気概もなきありさまでは先人に顔向けできないものである。国は貧乏して滅んだ国はないといわれている。腐敗と誇りの喪失で国は滅びると。

『現代の日本にあつて武士道精神は有りや無しや』インド人留学生の詰問。三島由紀夫の50年前の義挙。日本が日本たるべき文化の中心に皇室を仰ぎ、その国ぶりを復興せよとの遺言と肝に銘じていきたいと。